多和田真一郎著
『沖縄語音韻の歴史的研究』
大野真男

1. 琉球方言の音韻研究全般における本書の位置づけ

従来の琉球方言の音韻研究は、広範囲な島嶼にわたり下位方言間の変異が著しく、かつ文献資料が乏しいために、方言ごとの共時的記述研究と、それにもとづく方言間の比較を通じた変容過程の再構築が主となる傾向にあった。その一つの象徴的な成果として中本正智『琉球方言音韻の研究』(1976) があげられるだろう。しかし、そのような手法においては変容時期の想定は相対的であり、絶対年代を確定することは困難な状況にあったといえる。

文献資料にもとづくものとしては、伊波幸右『『海東諸国紀』附載の古琉球語について』(1931) や外間守善『『おもろさうし』の仮名遣いと表記法』(1965) などの先駆的研究があるが、日野資純氏が巻頭で「沖縄語音韻をこのように組織的体系的そして歴史的に研究した成果は、従来まったく示されなかったのである」と述べているように、本書は5世紀間にわたって膨大な文献資料を網羅し、初めて沖縄語音韻の「通史」を明らかにした歴史的研究となっている。文献資料の制約上、沖縄南部方言に限定されるとはいえ、中本正智(1976) 等で想定された琉球方言の歴史的変容過程を文献資料の側から検証し、かつ新たな知見を示すという点で、本書は琉球方言全体にわたる音韻の通時的研究に極めて重要な影響を与える。

2. 本书の構成

著者は既に外国語資料を用いた沖縄語研究として「琉球・呂宋漂海録」の研究——二百年前の琉球・呂宋の民族・言語——(武蔵野書院、1994)、『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』(同、1997)、『沖縄語漢字資料の研究』(渓水社、1998)を刊行している。本書は、これらの成果を踏まえて、朝鮮のハングル資料、中国の漢字資料、欧米人によるアルファベット資料、沖縄側の仮名資料に基づく沖縄語音韻の歴史的研究の集大成として、16世紀から20世紀にかけての変容を通観するものである。各世紀ごとに一章が設けられ、母音(短母音・母音連続)・半母音(ヤ・ヲ行)・子音(カ・ガ・タ・ダ・ハ・パ・サ・ザ・マ・ナ・ラ行)・その他(撥音・促音・口蓋化と破擦音化・声門閉鎖と非声門閉鎖・無気音・有声子音の前の鼻音)について、ハングル表記の推定音・音訳
3. 序章 「沖縄語音韻の歴史的研究」分析対象資料一覧及び用例の示し方

16世紀音韻の分析対象資料のうち、ハングル資料として『海東諸国紀』附載「語音翻訳」(1501)が、漢字資料として、「華夷訳語」の一つ「琉球館訳語」(16世紀前半)、陳侃『使琉球錄』中の「夷語」(1534)、郭汝霖『使琉球錄』中の「夷語」(1561)、周鍾等『音韻字海』中の「附録夷語音音（1572頃）、蕭崇業『使琉球錄』中の「夷語」(1579)がそれぞれあげられている。また、仮名資料として、「たまおとんのひもん」(1501)、「石門之東之碑文（国王頒德碑）」(1522)、「石門の西の碑文（真珠湶碑文）」(1522)、「田名文書第1号（1523）〜第10号（1593）」、「崇元寺之東之碑文の文」(1527)、「おもろきょうし（1531）、『かたはなの碑おもての文」(1543)、「添経御門の南のひのもん」(1546)、「やはりすりくすくの碑おもての文」(1554)、「浦添域の前の碑おもての文」(1597)があげられている。

17世紀の分析対象資料は、漢字資料として松子『使琉球文書』中の「夷語」(1606)、仮名資料として『田名文書第11号』(1606)、「おもろきょうし」巻二(1613)、「ようとれのひのもん」(1620)、「おもろきょうし」巻三〜巻二十二(1623)、「本覚山碑文」(1624)、漢字仮名混じり資料として『田名文書第12号』(1627)〜第16号(1660)が使われている。

18世紀の分析対象資料は、漢字資料として徐葆光『中山伝信録』中の「琉球語」(1721)、潘相『琉球入學見聞録』中の「土音」(1764)、「琉球訳」(1800頃)が、仮名資料として『仲里旧記』(1703頃)、「混効演集」(1711)、「琉球国由来記」(1713)があげられている。

19世紀の分析対象資料は、ハングル資料として『琉球・呂宋漂海録』中の「言語」「琉球」語(1818)、アルファベット資料として「クリフォード琉球語彙」(1818)、チェンバレン『琉球語文典』中の「琉球会話」(1895)、仮名資料として「琉球官話集」、「沖縄対話」(1880)があげられている。
4. 第Ⅰ章 15世紀以前の沖縄語音韻及び沖縄語音韻の変化過程

16世紀以降の音変化の出発点として文献資料の存しない15世紀以前の沖縄語の音韻体系が想定されており、母音については/i/, e, a, o, u/の5母音が示されている。これは、上代特殊仮名遣い甲類音・乙類音の対立を視野に入れて比較すべきとする服部四郎「琉球語」および「國語の音韻法則」(1932)に端を発する考え方と相容れないが、少なくとも沖縄語の直接の母体となった15世紀琉球語には服部(1932)の示唆する特性は備わっていなかったと筆者が想定しているのがうかがわれ、評者も妥当な前提として理解できる。一方で、子音に関して/di/と/zii/、/du/と/zu/が、関連して/ti/及び/tu/が想定されていることについては、16世紀音韻において既に四つ仮名対立の失われている実態が本書で検証されていることに照らすと、16世紀直近の前提としてはやや遅和感を感じるが、章題にある「15世紀以前」の時間設定がかなりの幅で想定されていると理解すべきであろう。

このような音韻体系を踏まえて、現代沖縄語に至る過程としての音変化の見取り図が、母音・半母音・子音（カ・ガ・タ・タ・ハ・バ・サ・ザ・マ・ナ・ラ行）について示されている。また、その他として多様な環境における撥音化、促音化、口蓋化と破擦音化、声門閉鎖（喉頭化）と非声門閉鎖（非喉頭化）、無気音、有声子音の前の鼻音について項目化している。このうち、口蓋化と破擦音化の項目は、単独拍の変化として「肝」がチムに、隣接拍への同化としては「板」がイチャになるような変化を一般的には指すが、本章ではス・ズ・ツ拍が舌音化を経てシ・ジ・チ拍へと変化する音現象を含めて論じている。この音変化については、伊波普照「『海東諸国記』附載の古琉球語について」(1931)において中舌母音の起源の一つとして論じられたものであり、口蓋化とそれに伴う破擦音化とは別契機による音変化として独立の別項目で扱われるべき変化ではないかと評者は考える（なお「第Ⅶ章、分析の續きと更なる考究」では声母音の問題として扱われている）。

5. 第Ⅱ章～Ⅵ章 16～20世紀沖縄語の音韻

第Ⅶ章の「分析の續きと更なる考究」が本書の全体的な総括に当たり、先行研究と付き合わせた際の種々の問題点が論じられているのに対し、第Ⅱ章～Ⅵ章の部分は各世紀の音韻の状態を各文献の用例に基づき記述した明細表に相当する位置づけとなってい
16世紀における */e/ については、仮名表記ではイ段との混用は見出されないものの、
ハングル資料・漢字資料からは中舌的な母音も含めてiからeの中間的な状態が推測されている。
*/u/ については、ハングル資料・漢字資料からス・ズ・ツに対応する場合には
中舌母音が出現していることが確認されている。*/o/ については、仮名資料からはウ段音
との混用は概ね見いだされないものの、ハングル資料・漢字資料ではオ段・ウ段の混
用が記述されている。注目されるのは母音連続である。*/e/については既に融合してい
ることが推察されるが、*/ai/ 及び */ae/ については仮名資料・ハングル資料・漢字資料
ともに融合した用例が得られていない。*/au/ については、仮名資料では概ね融合して
いないが、ハングル資料・漢字資料では融合・非融合が併存状況にあり、*/ao/ につい
ても同様である。ハ行音については、仮名資料では音価は不明だが、ハングル資料では
ph あるいは p に当たる表記で表されており、ph が具体的にどのような音価を表している
か議論のあるところかと思われるが、p ～ φ 音をとどめていることが検証されている。
漢字資料でも同様であり、語中のハ行転呼についても観察されている。

17世紀における */e/ については、仮名表記でもイ段との混用は見出されるとされて
いる。*/ai/ 及び */ae/ については、いまだ融合例が見られていない。*/u/ については、ス・
ズ・ツに対応する場合は中舌母音と推定されている。*/o/ については、仮名資料におい
ても若干ウ段表記が混用される場合があるが原則的にオ段表記である。しかしながら漢
字資料からは概ねウ段音化していることが検証されている。*/au/ については、仮名資
料・漢字資料においても融合していないようである。ハ行音については、漢字資料から
p ～ φ 音であったことが知られる。キは基本的には口蓋化していないが、仮名資料にチ
表記が混ざることが観察されている。

18世紀に入ると、*/e/ についての仮名表記ではイ段との混用が多くなり、漢字資料で
はイ段音として表記されることが一般的となっている。*/ai/ 及び */ae/ については、仮

NII-Electronic Library Service
名表記ではまだ融合例が見られないが、漢字資料の一部には融合形が現れているものがある。*i/u*については、ス・ズ・ツに対応する場合は中舌母音のほかに、イ段音が対応している場合が現れてくる。*i/o*については、前世紀同様に仮名資料では原則的にオ段表記されているが、漢字資料からは概ねウ段音化していることがわかる。*i/au*については、漢字資料にpの名残は見られるものの、大勢はΦとなっている。キ・ギについては概ね口蓋化・破擦音化しチ・ジと変化していることがわかる。

19世紀における*i/e*については、ハングル資料から中舌的な母音も含めてiからeの中間的な状態が続いていることが推測されているが、アルファベット資料ではeeまたはi（クリフォード）あるいはi（チェンバレン）のように統一されている。前世紀まで融合が一般的でなかった*i/ai*及び*i/aеН*については、ハングル資料・アルファベット資料・仮名資料とも融合する形が優勢を占めている。*i/u*については、ス・ズ・ツに対応する場合においても概ねイ段音に対応している。*i/o*については、三種の資料の間に微妙な揺れは存するものの、音価としてはuであったろうと推測されている。*i/au*及び*i/aол*についても概ね融合したオ段長音と推測されている。ハ行音については、Φが保持されているものの、新たにhが現れてきている。キ・ギについては前世紀同様、口盖化・破擦音化しチ・ジと変化している。

20世紀において、*i/e*はiに、*i/ai*及び*i/aеН*はeに、ス・ズ・ツに対応する*i/u*はiに、*i/o*はuに、*i/au*及び*i/aол*はoに、ハ行音はΦあるいはhに、キ・ギは口蓋化・破擦音化しチ・ジにというように、現代の沖縄南部方言の状況があらためて報告されている。

6. 第Ⅶ章 分析の締めと更なる考究

以上の分析のまとめが行われている最終章であり、先行研究と歴史的解釈の異なる場合には筆者の考察が示されている。音変化の各項目に関連する音節について、資料別に16世紀から20世紀に至る年代順に配列した一覧表を掲げた上で、音変化がどの時点で生じたかを明示している。とりわけ琉球方言の大きな歴史的特徴である母音の三母音化の過程に関しては丹念な議論が行われている。

*i/e*から*i/i*への変化に関しては、伊波普猷・外間守善・中本正智・高橋俊三による「おもろさうし」などの仮名資料に依拠した説に言及し、問題にしているものが「仮名の呪縛」によって表現なのか音声なのか音韻なのかが判然としない旨の批判的見解を示した上で、ハングル資料「語音翻訳」による音訳表記をもとに、過渡的ではあっても音韻的に*i/i*の状態を経た上でイ母音化したことが検証されることを述べている。

*i/u*からの変化については、ス・ズ・ツに対応する音節（本書では*su*/zu*（*du*/*tu*と表記されている）に限定して、16世紀の「語音翻訳」の段階で既に中舌母音化して
いることが確認され、母音の音価の表し方に議論の余地はあるものの 17 世紀初頭まで
/sʊ/ [sʊ]・/zʊ/ [dzʊ]・/ɕʊ/ [tsʊ] の状態にあり、17 世紀いっぱいいは /sɪ/ [ɕɪ]・/zɪ/ [dzɪ]・
/ɕɪ/ [tsɪ] の状態に移行し、18 世紀以降 20 世紀まで /sɪ/ [ɕɪ]・/zɪ/ [dzɪ]・/ɕɪ/ [tsɪ] のよう
にイ母音化し、現代沖縄語において /ʃɪ/ [ʃɪ]・/ʒɪ/ [ʃɪ]・/ɕɪ/ [ɕɪ] のように子音部分の
口蓋化が生じていることを検証しており、琉球方言における中舌母音の生成過程を考え
るうえで極めて重要な示唆を与えるものである。なお、ス・ズ・ツ以外の音節のウ母音
は変化していない。

*io/からの変化に関連して、連母音オウなどから融合母音 ɔ が生じたために本来の
オ段音が狭まる動きが生じてウ段音化したとする中本正智『琉球方言音韻の研究』(1976)
及び柳田征司『室町時代語を通して見た日本語音韻史』(1993) による説明に言及した
上で、ウ段音化の時期については 16 世紀に遡りうることを示している。

さらに母音連続に関して、*lai/及び *lai/については、/lai/ 及び /lai/ へと変化した後
に融合すること、すなわち母音融合以前に e → i 及び o → u の変化が起きていることが
指摘されている。一方で、連母音の融合自体について、*ail/ は 16 世紀末段階で融合・非
融合が併存状況にあり、安定してオ段長音となるのは 19 世紀以降であることが明らか
にされている。また、*ail/がエ段長音として融合するのは 18 世紀末からと判断され
ている。

以上の分析を踏まえて、母音融合により新たなエ段音及びオ段音が発生したことにつ
よって在来の e 及び o が衝突を避けるために i 及び u に変化したと想定する中本正智等
による従来の三母音化の説明に対して、「むしろ、逆である。･･･「三母音化」の後に、
「母音融合」が生じたと見るしかない。」と明確な反論を唱えている。この新たな知見は、
沖縄南部方言における音韻史についてのみならず、琉球方言全体の音韻史の再構築に当
たっても極めて重大な示唆を与えるものであり、例えば南琉球宮古諸島方言の一部にお
いて母音融合が認められないにもかかわらず中舌母音を含めた高母音化が生じているこ
との要因についてもあらためて問い直さなければならないだろう。

本書が新たに示すことは上記の三母音化に限らず広範な音韻項目にわたってお
り、紙数の制約ですべて紹介することができないが、今後は琉球方言音韻の研究者にとっ
て必ず参照しなければならない文献の一つとなることだろう。なお、著者の力量不足か
ら漢字資料及びハングル資料における音価推定については表層的な理解にとどまった憾
みがあることをご要望願いたい。

(2010 年 6 月 26 日発行 渋水社刊 B5 判 962 ページ 15,500 円 + 税)
——岩手大学教授——
(2011 年 10 月 11 日 受理)